

## 地域研究

援農有償ボランティア事業における学生の参加意識の概況と  
心理的報酬を補完する取り組みについて

今野聖士\*

名寄市立大学保健福祉学部教養教育部

キーワード：農業雇用労働力 労働力不足 援農ボランティア

## 1. はじめに

今日の農業において、雇用労働力不足が叫ばれるようになって久しい。雇用労働力を十分に確保するため、農家は雇用環境の充実などの工夫を行ってきた。その結果、農業センサスによれば、2010年、2015年と常雇（7ヶ月以上の期間を定めて雇用する労働者）は増加傾向にあり、2022年度の国勢調査の結果からもその傾向が続いていることが示唆されている。すなわち、農業・農村を取り巻く環境の変化、特に労働力の減少と偏り（都市圏への地域的偏り・業種における労働力需給の偏り）によって、短期的な雇用はさらに確保が難しくなっている。全産業的にこのような状況が生じている中では、「農業を知らない世代（＝周囲に農業者がおらず農作業のイメージが出来ない世代）」が増加する中で、屋外作業・3Kを連想させる農業において、その被雇用者を十分に確保することは困難である。このため、被雇用者の農外流出を抑えるため、常雇化、あるいは社員として雇用することで、その労働力を確保する取り組みを進めてきた（当然、低賃金の固定化の懸念やキャリアプランを示す必要性など、別の課題が発生していることは言うまでも無い）。

それでは全てが常雇化・法人化によって解決するかと言えば、それは不可能である。常雇化・法人化による社員化するためには通年かつ一定の作業を確保する必要があることから、一部の大規模野菜作経営や通年型野菜産地以外は難しい。加えて、常雇化・法人雇用が進むと、地域農業よりも個別経営の最適化を志向することとなり、農協共販からの離脱や政策作物への転換が進むこととなる。青果物のような労働力需要のピークが激しい生産物においては、常雇が全てのピークをカバーすることは出来ず、臨時雇が不可欠であることに変わりはない。労働力を与件として捉え、確保出来る労働力によって作付可能な品目が規定されるような事態が起きているのである。臨時雇が雇用できれば労働力多投的な青果物を、常雇が確保出来ればピークの少ない通年作業が発生する品目へ、十分な雇用労働力が確保できない農家は、雇用をとりやめ、水稻や小麦・大豆といった省力的な作物となる。この対応によって農家の営農・経営としては、最適化されるものの、地域農業や生産物の販売戦略として考えると、労働投下的な青果物生産の縮小と耕種農業の拡大は、必ずしも歓迎される事態ではない。したがって、地方自治体やJA等、地域農業のあり方を考えるべき主体において、何らかの形で臨時的な労働力を支援するインセンティブが生じる。

一方で農村人口の減少、高齢化等により臨時雇の確保は困難となり、これまで以上に多様な「労働力」の給源、例えば障害者雇用やボランティア等に注目が集まっている。中でも大学生による援農ボランティアの取り組みはこれまでも一定の役割を果たしており、今後ますます重要になると考えられる。

しかし、大学生に援農ボランティアを呼びかける場合、以下の課題がある。1つ目は大学生の属性への対応である。これは本テーマの前年度までの原稿で明らかにしているが、農業に関心・関係性のない学生の参加のハードルを下げる様々な工夫である（貸出や条件の確保、農家の意識等）。2つ目はボランティア／有償水準のバランスである。これまで多くの地域で行われてきた援農ボランティアは、“無償”が基本とされてい

\*責任著者 E-mail:m-konno@nayoro.ac.jp

た。ボランティアである以上自発的な参加が基本となるが、農業は一般的に居住地から離れており、自発的参加のためには移動手段を要する。このため定年退職者を中心としたコミュニティが援農ボランティアの中心となっていた(心理的報酬、特に保健リクリエーション効果であることが指摘されている)。一方で大学生は、移動手段を持たないため送迎を要し、送迎に係るコストを農家が回収する必要性が生じる。また学生の農業・農村への関心は個人差が大きい(所属学部に係る専門性の影響が大きいと考えられる)、ボランティアに参加するためのインセンティブが異なり、とりわけ名寄市立大学(以下「本学」)のような福祉医療系(≠農学系)では純粋なボランティア対象として農業を選択する学生は多くない。このため、本学ではボランティアによる心理的報酬を補完するため、有償ボランティアとしている。最低賃金に比する水準の“有償”をボランティアの範疇として良いのかという議論もあると思われるが、全産業的労働力不足下において、有償水準のみ(最低賃金水準のアルバイト)であれば、小売業をはじめとする身体的負担の少ない他産業に就業すると考えられ、本事業において最低賃金水準であっても多くの学生が参画し、また多数が継続して援農に参加していることから、本稿ではボランティアの範疇に含めている。

さて、以上のような状況を受け、2018年度から名寄市立大学コミュニティケア教育研究センター(以下「ケア研」)の研究事業として、援農ボランティア事業を実施している。2022年度も引き続きケア研、名寄市農務課、JA道北なよろ営農部営農課からご支援・ご協力を頂き、学生からも有償ボランティアの協力を頂いて事業を実施した。本稿では本年度の状況を整理した上で、学生の参加意識の特徴についてアンケート調査の結果から確認していきたい。あわせて、本年は新たに参加学生の心理的報酬を補完する取り組みについて整理したい。

昨年度明らかにしたように、本事業は有償でありアルバイトの要素を持ちつつも、作業強度等から考えると最低賃金水準では参加のモチベーションを維持できない(=最低賃金+ $\alpha$ 水準で募集される農業アルバイトへの応募数が少ないことから裏付けられる)ため、ボランティアとしての心理的報酬(農家とのコミュニケーション)が必要である。本年はこの心理的報酬を補完する取り組みとして、参加学生へ援農有償ボランティア参加認定証の交付および表彰を行った。この取り組み状況についても整理し、本年度のまとめとした。

## 2. 援農ボランティア事業実施の経緯

本節では、昨年度の報告に引き続き事業実施の経過について今野(2019)から一部を引用するかたちで整理する。なお詳細に当たっては拙稿をご参照頂きたい。

2017年の春頃から、市役所・農協等農業を支援する立場の機関へ何らかの支援を期待する声が農業者から寄せられるようになった。また、筆者のところにも講義等で関係性をもった農家から労働力不足の状況や、学生アルバイトの募集に関する相談が寄せられるようになった。そこで、関係機関と協議の上、試験的に講義で関係性のある農家とのマッチングを試みることにした。結果、春夏期に計15名程度が農家アルバイトに従事した。極めて限定的とはいえ、20名近くの参加者があり、学生・農家双方から継続展開を求める声があったことから、関係機関と協議の上、事業実施を検討することとなり、2018年度に事業名を「名寄市立大学生援農アルバイト事業」(現在は名寄市立大学援農有償ボランティア事業)とし、関係機関にそれぞれ担当を設置した。大学はケア研(担当:センター企画委員兼本研究事業担当の教員)、市は経済部農務課(担当:課長)、JA道北なよろ(担当:営農部営農課長、アスパラ部会長、スイートコーン部会長)とした。大学は、ケア研が通常のボランティア支援に準ずる形で各種支援(問い合わせや募集など)を実施するほか、本事業をケア研課題研究として採択し、事業実施に係る費用の一部、また研究を実施するに当たっての費用を支援する体制を取って頂いた。また、市および農協等が構成員となっているファームサポート協議会から、学生が使用する長靴・作業着(ツナギ)・雨合羽の貸与を受けている。

事業期間は2期制とし、1期を5月中旬～6月下旬、2期を夏休み期間中とした。主な想定作業は1期がアスパラ関連作業、2期がスイートコーンやカボチャ関連作業である。

本事業を行うに当たって重要な検討事項となったのが雇用条件の統一である。一括して募集・マッチングを行うため、紹介先農家によって雇用条件が異なることは学生の不利益になる。また安全面の配慮（危険な作業の禁止・労災等傷害保険の加入・送迎中の事故に対応出来る自動車保険の確認、雇用時間等）も万全を期した。

### 3. 2022年度援農ボランティア事業の経過

表1に本事業の概要を示した。運営主体はこれまでと同様、ケア研、JA道北なよろ、名寄市農務課で構成した。実施作業も同様で1期は5月中旬～6月下旬、2期は夏休み期間中（8月中旬～9月下旬）とした。受入農家戸数は1期13戸（昨年-1戸）、2期11戸（同-5戸）となり、2021年度より若干減少した。これは昨年度コロナ禍の影響により中国人技能実習生が入国できず、援農ボランティアによる支援を必要とする農家が増えた反動であると考えられる（本年度は中国人技能実習生に依存しない体制に農家が移行している）。参加学生数は1期37名（昨年-5名）・2期38名（同+16名）とこちらは2021年度に比べて1期若干減少、2期大幅な増加となっている。2期の大幅増加分は事務局を通さずスケジュール調整をする形で参加する学生の増加分である。事業の安定化とともに、昨年度や1期参加学生がそのまま2期の農家に雇用・援農ボランティアとして参加する形態が増加している。有償の水準は昨年同額の900円で据え置かれた。有償水準は受入農家が事業開始前に集合して議論する「受入農家説明会」の席上で検討される。当初インセンティブの低下を心配して若干の増額を提案する声もあったが、「アルバイトとの差別化を維持したい（単純な労働力として見ない）」「ボランティアによる参加という趣旨を大事にしたい」といった声から900円のままとし、心理的報酬についてより農家が注意を払うことが確認された。

表2に事業実施にかかるスケジュールを整理した。実施に当たっては、昨年同様対面説明会を実施する事ができなかったため、全てオンラインで実施した。説明のための簡易な特設サイト・Zoom相談受付・Google Formsを利用した参加受付と貸し出し品の集約といったオンラインツールによる広報、連絡となった。その他、アナログの手段としては、学生が講義資料を受取に来る際にデジタルサイネージを設置して広報を試みた（数名程度の申込があった）。

本事業の特徴である貸与品の貸し出しについても、対面による随時貸し出しが出来なかったことから、昨年同様、学生ごとに袋詰めした貸与品を班ごとに並べ各自が回収する方法をとった。数名が受取に現れないというトラブルはあったが、概ねスムーズに実施できた。一方

表1 援農(有償)ボランティア事業の概要

運営主体	名寄市立大学コミュニティケア教育研究センター（担当教員） JA道北なよろ営農販売部営農課 名寄市経済部農務課
実施事業	アスパラおよびスイートコーンの収穫・調整を中心とした作業
実施時期	1期:5月14日頃～6月26日頃の土日中心 2期:8月11日頃～9月19日頃(夏期休暇期間中)
募集範囲	名寄市立大学 学生(学年問わず)
受入農家	1期:13戸 2期:11戸
参加学生数 (計画値)	1期:37名・延べ332人日作業従事 2期:38名・延べ351人日作業従事(計画値)

資料:事業運営資料を元に筆者作成  
注:参加学生数は当初の計画値である。実際は作業進度や学生のスケジュール変更、体調等による調整があり、若干の変動(主にマイナス方向)が想定される。

表2 事業実施に係るスケジュール

日付	内容
2021年12月頃	市役所・農協と事業開始検討について協議
2022年3月末	アスパラ生産組合全戸へ希望を照会
3月31日	農協と打合せ(実施最終判断)
4月25日	受入希望農家説明会(期間・時給・支援策等確定)
4月26日	学生向け説明ビデオ配信開始・随時受付 参加学生向け特設説明サイト公開
5月14日	1期作業開始 作業服・長靴・雨合羽貸与開始
期間中随時	参加学生(リーダー)より状況聴取、対応
6月上旬	スイートコーン生産組合全戸へ希望を照会
6月26日	1期事業終了・交流会中止
6月27日	受入希望農家説明会(期間・時給・支援策等確定)
7月19日	学生参加受付開始(定員まで随時配置)
8月11日	2期作業開始
9月19日	2期事業終了・交流会中止

資料:事業運営資料を元に筆者作成

で、準備の負担が大きいことやサイズが合わなかった場合にその場での調整ができないといった課題もある。

また事業の実施に際しては、昨年同様コロナウイルス感染拡大防止策の徹底を学生・農家双方に強く要請した。基本的には農林水産省の「農業者に新型コロナウイルス感染者が発生した時の対応及び事業継続に関する基本的なガイドライン」を遵守頂くよう要請した。一方で、常時のマスク着用は熱中症の危険があることから、十分な換気・距離を取った上でマスクを外すことや、休憩の確保と言った安全管理について特に留意頂くよう要請した。結果、昨年同様本事業による感染者が発生しなかったことは参加者一同の努力によるものであり、深く感謝したい。

これまで、期中、終了後に対面式の意見交換会（学生および農家それぞれ個別に実施）を行い、参加学生・農家の意見を聴取していたが、今期も実施できなかった。このため、貸与品の返却時に少人数で個別に状況を把握するよう努めた。また、各期終了後に学生・農家が一堂に会した反省会（ジンギスカンパーティ）を行っていたが、実施できなかった。単純な打ち上げ以上に、本事業の意義する貴重な機会であったため、非常に残念な結果となった。詳しくは後述するが、より学生の継続参加を盛り上げるような工夫（心理的報酬を高めるため）として、今年度より「援農有償ボランティア事業認定証」の交付を行う事とし、農家や関係各所の下承を得た。

#### 4. 事業の実績

##### 1) 第1期事業の実績

表3に参加学生の属性を示した。1年生が28名と大半を占めたが、2年生7名、3年生3名の参加があった。学科は昨年同様栄養学科が若干多くなっている。表4に単純集計した農家別作業従事回数を示した。全体で見ると5月はのべ149回参加（昨年+20回）、6月はのべ140回参加（昨年-63回）、通期ではのべ289回

表3 1期参加学生の属性

1年生	28
2年生	7
3年生	3
4年生	0
男性	5
女性	33
栄養	15
看護	10
社会福祉	6
社会保育	7

資料：運営資料より筆者が作成

表4 農家別作業従事回数(単純集計)

	A農家	B農家	C農家	D農家	E農家	F農家	G農家	H農家	I農家	J農家	K農家	L農家	M農家	総計	農家一戸あたり 単純平均
5月土日	6	12	3	26	8	20	9	12	8	13	3	9	20	149	11.5
5月平日	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.0
5月計	6	12	3	26	8	20	9	12	8	13	3	9	20	149	11.5
6月土日	1	14	4	17	6	27	16	12	4	5	8	6	18	138	10.6
6月平日	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0.2
6月計	1	15	5	17	6	27	16	12	4	5	8	6	18	140	10.8
総計	7	27	8	43	14	47	25	24	12	18	11	15	38	289	22.2
うち平日	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0.2

注：平日参加の場合も1回としてカウントしている

（昨年▲53回）の参加があった（日誌記入者のみ）。平日は講義の関係からほぼ参加はなく、土日が中心となっている。農家ごとに参加人数に差があるため、単純平均の意味合いは薄いものの、平均してのべ20名の学生が農家の元に訪れたこととなる。同じく表5から全体の参加状況を整理すると、学生1人あたりで見ると平均参加回数は7.8回（2021年度8.1回）、最も参加数が多い学生で14回（同14回）、少ない学生で3回（同1回）である。若干昨年より参加回数が減少しており、天候の影響によるアスパラ収穫量の減少が影響していると考えられる。

表5 参加学生間の作業従事回数の平均値

単純回数平均	7.8
フルタイム換算平均	7.2
最大単純回数	14.0
最小単純回数	3.0
最大フルタイム換算	14.0
最小フルタイム換算	2.5
合計参加回数(単純回数)	289.0
合計参加回数(フルタイム換算)	267.0
合計参加回数(全日参加)	249.0
合計参加回数(半日参加)	36.0
全日：半日比	6.91:1
残業有り回数	3.0

資料：運営資料より筆者作成

注：アンケート回答者のみ(41名)

## 2) 第2期事業の実績

続いて本項では第2期事業の実績を各表から述べる。まず参加学生の属性を表6から確認すると、1年生、女性が多く、学科に偏りは見られない。最下段の「事務局調整」とは事業実施事務局が各農家に学生のシフト配置を行った（従前通りの）ケースである。農家独自調整とは、学生の配属と貸与品の貸し出しのみ事務局で担当し、シフト配置は各農家に一任する形式である。主に過年度の経験者が参加する場合に用いている（本年度は10名以上増加した）。次に表7に旬別作業従事回数を示した（アンケート回答者のみ）。期間を通じた参加回数は総計196回であり、平均値としては1日当たり4.7名が参加していた。表8に個人別の従事状況を示した。把握率（回答学生数/参加学生数）は78.9%である（表7も同じ）。1週間以上を最低参加期間に設定したため、平均参加回数は6.6回である。ただし、個人差が大きく、最大は19回である。

**表6 2期参加学生の属性**

1年生	20
2年生	9
3年生	8
4年生	1
男性	5
女性	33
栄誉	12
看護	11
社会福祉	7
社会保育	8
事務局調整	24
農家独自調整(貸出)	14

資料：運営資料より筆者が作成

**表7 旬別作業従事回数  
(単純集計・回答があった分のみ)**

期間	参加回数
開始から1週間(8/上旬-14)	16
2週目(8/15-21)	54
3週目(8/22-28)	44
4週目(8/29-9/4)	29
5週目(9/5-11)	33
6週目以降(9/12-23)	20
8月計	127
9月計	69
総計	196
従事日数	42
1日あたり最大従事人数	12
1日あたり平均従事人数	4.7

資料：運営資料より筆者が作成

注：数値は作業日誌に記入があったもののみ(30名分)を集計しているため、実際は上振れしている可能性が高い

**表8 個人別作業従事回数**

項目	参加回数
回答者数	30
把握率	78.9%
総参加数	198
最小参加数	1
最大参加数	19
平均参加数	6.6
1~4回参加	30.0%
5~9回参加	46.7%
10~14回参加	10.0%
15回以上	13.3%

資料：運営資料より筆者が作成

## 5. 学生の参加意識の特徴

本年度も学生の参加意識の特徴を1期・2期それぞれ実施したアンケート結果を元に考察していきたい。1期26名、2期19名から回答があり、回収率はそれぞれ70.2%、50.0%である。1期・2期で一部質問項目が異なる設問があるが、共通項目を中心に整理した。まず表9に学生の農作業経験の有無を示した。1期は5割以上が初めての経験であり、2期は6割が初めての経験であった。次に表10に期別の参加動機を示した。複数回答のため比率はMA比である。MA比とは項目の回答数を「回答総数」ではなく「回答者数」で割り返したもので、何%の学生がその選択肢を選んだかを示している。1期・2期ともに最も多い回答が「アルバイトとして」である。1期で80%以上、2期でも84%以上の学生が選択している。一方で農作業体験・農業農村への関心が1期では69%以上、2期でも農作業体験が68%以上と大きくなっており、本年も必ずしもアルバイト“のみ”の目的ではないことが伺える。“有償部分”が主たる動機となった場合、「本事業はボランティアであるのか？」という疑問が生じる。しかし、学生にとって他に多くの選択肢がある中で（農業以外のアルバイトは天候による中止や早朝・炎天下の作業といった過酷さはない）、他産業の

**表9 期別・農作業に参加した経験の有無**

期別	項目	割合
1期	はじめて	52.5%
	数回経験あり	12.5%
	何度も経験あり(もしくは実家・親戚が農家)	0.0%
2期	はじめて	63.2%
	今年の1期に参加したので2回目	21.1%
	昨年以前に参加した事がある	15.8%

資料：参加学生アンケートより筆者作成

**表10 期別・参加動機(複数回答・MA比)**

期別	参加動機	実数	MA比
1期	アルバイトとして(小計)	24	-
	アルバイトとして;主に趣味など娯楽費	14	53.8%
	アルバイトとして;主に生活費	10	38.5%
	農作業体験として	18	69.2%
	土日のみというスケジュールが都合良かった	12	46.2%
	個人で農業アルバイトに応募するより気軽だったから	12	46.2%
	農業・農村に興味があった	11	42.3%
	農家と交流してみたかった	11	42.3%
	学生同士で交流できると思ったから	9	34.6%
	農業に限らずボランティアに興味があったから	8	30.8%
	食・農を知ることで自分の専門に役立ちそうだった	7	26.9%
	農業を支援したいと思ったから	7	26.9%
	コロナウイルスのリスクが低い活動だと思ったから	1	3.8%
	知人に誘われたから	1	3.8%
2期	純粋なアルバイトとして	14	73.7%
	農作業体験として	13	68.4%
	農業・農村に興味があった	7	36.8%
	夏休みの中で好きな期間というスケジュールが都合良かった	6	31.6%
	食・農を知ることで自分の専門に役立ちそうだった	6	31.6%
	農家と交流してみたかった	5	26.3%
	農業を支援したいと思ったから	1	5.3%

資料：参加学生アンケートより筆者作成

注：各選択肢を回答総数1期26、2期19で除している

アルバイトとほぼ同額 (あるいは若干低い) の水準においても一定の人数が本事業に参加していることは、学生の動機が必ずしも“有償部分のみ”であるとは言えない。すなわち、金銭的な有償部分による参加動機 (やりがい) をボランティアによる心理的報酬が補完しうるからこそ、学生が参加していると考えられる。昨今のアルバイト賃金 (最低賃金) の上昇を鑑みると、心理的報酬に対する期待はより大きくなっていると想定される。一方で心理的報酬を引き上げる (より深い交流など) ことは、繁忙期である農家にとって負担が大きい。必ずしも金銭的負担が無いからと言って心理的報酬を引き上げることは農家にとって負荷が低いわけではないのである。

次に表 11・12 から学生の本事業に対する評価を確認する。まず表 11 では期別に学生が予定 (想定) していた参加回数と実際の参加回数についてその差異を尋ねている。1 期は班体制・週末×1 ヶ月半であるため、昨今のアスパラ不作の影響を受けつつも半数が概ね予定通り (想定していた回数参加できた) と回答している。2 期は任意の時期に任意の期間参加する仕組みのため、参加希望期間が短い場合、天候の影響を大きく受けることとなるが、2022 年度は概ね予定通りとの回答が得られている。一方で天候以外を理由とした中止も 3 割近くあるため、この点の改善が求められる。また、表 12 では期別に有償水準の評価を見たものである。悪かった (早朝・労働の大変さを考えると不十分な水準だった) との回答は少なく、普通から非常に良かったとの回答がほとんどである。このことから、有償と無償 (心理的報酬) のバランスがある程度取れていると考えられる。

続いて表 13~16 から今後の意向について整理する。まず表 13 では期別に今後の事業への参加意向を尋ねている。1 期・2 期ともに今後も参加してみたいとする意向が 3 割以上となっており、一定程度事業 (とりわけ農家の対応) に満足していると考えられる。ただし昨年度は同水準で 8 割を超えていたことから、内容の精査が必要である。表 14 では期別に、仮に次年度も参加する場合、どのような目的で参加するか (参加動機) を尋ねた。複数回答であるため比率は MA 比である。有償であることを反映して 1 期・2 期ともにアルバイトとしての目的を選択した学生が最も多くなっている。一方で、1 期では 3 割の学生が農作業体験 (農作業そのものに興味関心)、農家との交流、農業の支援を理由に挙げており、これらが心理的報酬の目的であると考えられる。2 期はより農作業体験や農家との交流に期待する回答が多く (6~7 割)、心理的報酬に対する

表 11 期別・予定参加回数と実際

項目	1期	2期
ほぼ予定通りだった	53.8%	50.0%
予定より少なくなった	30.8%	44.4%
うち天候以外が理由	3.8%	27.8%
うち天候が理由	15.4%	16.7%
予定以上に参加した	15.4%	5.6%

資料: 参加学生アンケートより筆者作成

表 12 期別・有償水準の評価

項目	(比率・%)	
	1期	2期
非常に良かった (早朝・労働の大変さを考えてもとても良かった)	46.2%	57.9%
良かった (早朝・労働の大変さを考えても良かった)	23.1%	15.8%
普通 (早朝・労働の大変さを考えると普通的水準)	30.8%	15.8%
悪かった (早朝・労働の大変さを考えると不十分な水準だった)	0.0%	10.5%

資料: 参加学生アンケートより筆者作成

表 13 期別・今後の参加意向

項目	(比率・%)	
	1期	2期
積極的に参加してみたい	38.5%	26.3%
参加してみたい	15.4%	10.5%
どちらでもない	46.2%	57.9%
参加したくない	0.0%	0.0%
その他	0.0%	5.3%

資料: 参加学生アンケートより筆者作成

表 14 期別・次年度参加検討時の想定目的 (MA比)

参加動機	1期	2期
アルバイトとして		100.0%
アルバイトとして; 主に趣味など娯楽費	50.0%	-
アルバイトとして; 主に生活費	46.2%	-
アルバイトとして; 土日のみというスケジュール重視	23.1%	-
農作業体験として	38.5%	73.3%
農家と交流してみたい	30.8%	60.0%
農業を支援したい	30.8%	40.0%
学生同士で交流	23.1%	-
個人で農業アルバイトに応募するより気軽	19.2%	-
農業に限らずボランティアに興味	15.4%	-
食・農を知ることで自分の専門に役立ちそう	15.4%	26.7%
農業・農村に興味	11.5%	20.0%

資料: 参加学生アンケートより筆者作成

注: 各選択肢を回答総数 1 期 26、2 期 15 (参加予定のない 4 名を除いた) で除している

表 15 期別・今後の要望と上位 3 項目の MA 比

項目	1期		2期	
	順位 (位)	特に希望する上位 3 項目 (MA比)	順位 (位)	特に希望する上位 3 項目 (MA比)
作業服等の支給	1	53.8%	1	31.6%
有償水準の向上	2	46.2%	1	31.6%
農家との交流	3	19.2%	6	10.5%
労働環境 (時間帯や作業場の温度など)	4	11.5%	6	10.5%
作業日数を長くしたい	4	11.5%	3	26.3%
お休みや作業日変更のしやすさ	4	11.5%	5	15.8%
雨天で作業中止の際の対応	4	11.5%	4	21.1%
農家との連絡方法 (電話以外の方法)	8	7.7%	6	10.5%

資料: 参加学生アンケートより筆者作成

注: 各選択肢を回答総数 1 期 40、2 期 18 (参加予定のない 1 名を除いた) で除している

期待値が大きくなっている。表 15 では期別に今後の事業展開に対する要望項目と特に希望する項目を尋ねた（要望は複数回答、特に希望する項目は3つまでの複数回答）。1期・2期ともに作業服の支給・有償水準向上が上位にきており、必須要件である事が分かる。3位以下は1期・2期で順位が異なり、1期は農家との交流、2期は作業期間の延伸があげられている。最後に表 16 では今後の援農・農業アルバイトへの参加意向を整理した。これは1期のみ項目であるため3カ年の比較とした。天候やコロナ禍の影響を大きく受けるため、細かい差を検討する意味は無いが、いずれも3割以上の学生が事業終了後に何らかの形で継続して農業に関わっていることが重要である。本事業は1期2期あわせても、のべ60名程度の事業であるが、3割の学生が継続して農業に関わり、そのうちの何割かの学生は年度を超えて参加しているとすれば、年間で100名以上の学生が参加している可能性がある。

以上のことから、例年同様、本事業に参加する学生は有償ボランティアであるためアルバイトの代替としての参加動機を持つものの、それが唯一の動機ではなく農家との交流や農業への関心といった心理的報酬をもうひとつの目的として参加していることが明らかになった。

表16 年別・1期参加者 今後農家と直接契約の予定があるか (比率・%)

項目	2020	2021	2022
ある(現在 従事中)	22.2%	7.7%	7.7%
ある(今後予定している・2期で参加する場合も含む)	20.4%	23.1%	23.1%
声はかけられたが未定	11.1%	17.9%	15.4%
予定していない	46.3%	51.3%	53.8%

資料:参加学生アンケートより筆者作成

## 6. 学生の心理的報酬を補完する新たな取り組みの概要

ここまでみてきた様に、本事業では有償（最低賃金水準）による金銭的報酬と農家との交流・農業農村を支援したい、支援出来ているという満足感である心理的報酬を適切に組み合わせることで、他産業と比して作業環境があまり良くない農業において、最低賃金水準でも多くの学生に参加してもらう事が出来ていた。

有償水準を引き上げることで学生の参加インセンティブを高め、より多くの学生の参加を期待することは可能だが、この場合、農家負担の増大と金額に見合った作業能力の期待が生じ、ミスマッチとなる可能性が高まる。逆に心理的報酬を強化することは、繁忙期における農家にとって負荷が大きいほか、農家ごと（経営主や実際に学生に接する者の個人的能力）の差が大きくなるという課題がある。

このため、農家の直接的な負荷とならない形で学生の参加インセンティブを高め、かつ継続的な参加を促すような仕組みを考えることとした。本年度はその第1弾として「名寄市立大学 援農有償ボランティア参加認定証」の交付を行う事とした。これは、各期における作業日誌のデータを元に、参加者が何回作業に参加したかをカウントし、名刺サイズのラミネートカードとして配布するものである。昨今の学生の就職活動においては、学業以外の体験、いわゆるボランティア活動の有無が問われることがある。認定証を交付することで、そのような際に積極的に参加したことが証明される事も期待している。

本年度は1月末の昼休みに交付式を実施し、希望者へ認定証の交付を行った。合わせて、各期ごとに参加回数の上位10名程度に市内のお菓子等の詰め合わせを副賞として進呈した。30名程度の参加があり、概ね好評であった。次年度も継続し、学生の参加意欲を高めていきたい。

課題としては、表彰の基準が「参加回数」が良いのか、という点がある。全員が一律の回数参加可能（予定）であるならば参加回数で良いと思われるが、1期は班によって参加人数・参加機会が異なるため、農家に支援を求められた回数、全て参加しても7回である班、あるいは数回欠席しても14回の班等がある。このため、参加回数のほか、各班の参加回数上位1名も表彰対象としたが、次年度以降は再検討が必要である。

とはいえ、農家負担なく、学生の参加意欲を高める取り組みとして重要であると考えられるため、次年度以降も継続していきたい。加えて、認定証の交付を受けるためには作業日数の記入（提出）が必須となるため、これまで捕捉率が低かった2期の独自調整者が日誌へ記入するインセンティブとなる事が期待できる。捕捉率の向上は当初からの課題であり、具体的な記入メリットが乏しかったことから、データ拡充の面でも

継続していきたい。

## 7. おわりに

以上のように「名寄市立大学学生援農ボランティア」研究事業は、昨今の労働力不足下における労働力補完を主目的としながらも、心理的報酬による補完によって、金銭以上の価値を学生が持ち帰れる取り組みとして定着しつつある。そのためには、昨年の繰り返しになるが、食農教育の視点を学生・農家両方が持つことが必要であり、単純な作業・労働力ではなく、多様な経験（農家との会話等も含む）をベースとした名寄ならではの体験・経験を提供することが求められる。とりわけ最近では、(本事業関連ではない) 各種の学生向けアンケートにおいても、援農ボランティアや農家アルバイトという単語が頻出するようになった。特に単なるアルバイト先、としての捉え方ではなく、「地域とのつながり」や「貴重な体験」といった言葉とセットで語られることも多いことから、本事業が定着してきているとの印象を持つ。次年度は、地域農業において本事業、また本学学生がどの程度寄与しているのか、網羅的な把握を行っていきたい。

本年も昨年に引き続きコロナ禍における影響を受け、制限した状況下における活動となったが、名寄市立大学コミュニティーケア教育研究センター・名寄市農務課・JA 道北なよろ営農販売部営農課の協力を得て、実施体制を作ることが出来た。この場をお借りして、関係各位に深く御礼申し上げます。

## 付記

本稿は、2022年度名寄市立大学コミュニティーケア教育研究センター課題研究による「援農有償ボランティア事業」、およびJSPS 科研費 22K05871 の助成を受けた研究成果の一部である。

「2. 援農ボランティア事業実施の経緯」は2019年度の筆者原稿から再校正の上収録している。初出 今野(2019)。

## 参考文献

今野聖士(2019) 援農ボランティア事業の実施に係る経緯と展開. 名寄市立大学コミュニティーケア教育研究センター 年報 第3号(通巻37号): 31-40.

今野聖士(2020) 援農有償ボランティア事業の運営実態と今後の展望. 名寄市立大学コミュニティーケア教育研究センター 年報 第4号(通巻38号): 33-40.

今野聖士(2021) コロナ禍における有償援農ボランティア事業の運営方式と課題. 名寄市立大学コミュニティーケア教育研究センター 年報 第5号(通巻39号): 17-26.

今野聖士(2022) 有償援農ボランティア事業における学生の参加意識の特徴とその変遷. 名寄市立大学コミュニティーケア教育研究センター 年報 第6号(通巻40号): 23-32.